

# 丸亀ドイツ兵俘虜収容所

## (1) 第一次世界大戦(1914~1918年)

オーストリア=ハンガリー帝国皇太子夫妻をセルビア人青年が暗殺した事件(サラエボ事件)によって両国が開戦、利害により欧州各国が参戦し、世界を巻き込んだ大戦争になっていきました。日本はドイツが有する南洋諸島及び中国権益に勢力拡大を図る好機と捉え、同盟国イギリスの要請を受ける形で参戦しました。直ちにドイツのアジアの拠点=青島(チンタオ)や南洋諸島の攻略作戦を実施。その後も地中海等の船団護衛、従軍看護婦隊の派遣等を行いました。



丸亀ドイツ兵俘虜、多度津港へ入港時の写真

## (2) ドイツ兵等俘虜の収容

青島のドイツ等守備隊は急遽アジア各地から招集した民間人も含む約5,000名。攻略する日英連合の大軍勢と約2ヶ月の激戦の末降伏し、俘虜約4,700名は日本各地12箇所の収容所に送られることになりました。歩兵連隊があった丸亀もその一つで、ロシア兵も収容した実績のある丸亀の本願寺塩屋別院が収容所に充てられました。

1914年11月16日、多度津港に上陸した324名の俘虜は徒歩で行進して塩屋別院に入り、板東に集約されるまで2年5ヶ月の丸亀生活が始まりました。

## (3) 俘虜に対する人道的な処遇

俘虜の扱いは国際条約があり、一等国を目指す日本はこれを遵守し、人道的な処遇を行いました。具体的には

- ①労役がない、②散歩ができる、③給与、食料を支給、
- ④物品購入、所内飲食が可能、⑤運動、勉学、演劇、音楽演奏の許可等を行いました。



運動会(組立体操)



滑稽芝居(ピエロ)

## (4) 俘虜と地域社会、住民との交流

政府方針もあり、地域社会及び住民は俘虜を歓待・優遇しました。具体的には①丸亀到着時の沿道に歓迎アーチ、②近隣銭湯の利用、③近隣民家での外泊、④俘虜の墓(土器町駒ヶ林)の現在に至るまでの世話等。また、ドイツ兵俘虜に関心を寄せ、物品の展示会に大勢の人々が押し寄せて殆どが売切れたり、体操の様子を見学したり、散歩中の交流もありました。

俘虜も個々人の持つ技能等を日本の求めに応じて丸亀高女での音楽演奏、県立工芸の講師、皮加工受注、展覧会出品等を行いました。こうした日独の交流がその後の両国関係の下地になっていきました。

当時の生活、交流を示す写真や資料類は、戦後、鳴門市が元俘虜との交流に取り組む中で丸亀収容所時代のものも多数収集・保管しており、丸亀市から積極的に連携し、ドイツとの交流に役立てています。



アマンドゥス・テンメの墓



酒保(ビールを飲むところ)



御坊さん参道を散歩